

『人類の最大犯罪は戦争』 桑原啓善 著

を読んで



今こそ「平和の種」を播こう！

——『人類の最大犯罪は戦争』を読んで

神奈川県 近藤美樹子

本書は、山波言太郎先生（本名・桑原啓善）が世界平和実現のための活動を始めた原点となる不戦のための4つの講演を収録したものです。講演が行われたのは1982年から84年にかけて、本の出版はそれから

約三十年後の2010年でした。何故三十年近くも経てから昔の古い講演を本として出版したのか、その理由について先生は、世界の様相や人々の考え方が三十年前から何一つ改善しておらず、それどころか講演の内容がその当時より2010年現在の世相に一層ピタリ適っているから、と序文で述べています。私はこの文言をそっくりそのまま2022年の今、繰り返し読みたいと思います。1980年代米ソ冷戦下の核戦争の脅威の中で行われた講演の後、1989年の「ベルリ

ンの壁崩壊」により冷戦は終結したものの、真の平和が訪れることはなく、その後も各地で紛争やテロが頻発して核兵器の開発が着々と進められ、とうとう今年2月、ロシアによるウクライナ侵攻が始まってしまいました。人類が武器をとって戦い始めてから五千年、「武力こそが身の安全を守る」という考えを信じて疑わなかった帰結がこれです。それ故、この考えがいかに間違っているかを指摘した本書は、今だからこそ多くの方々を読まれるべき書物だと思います。

今回の「ウクライナ危機」は世界平和を推進すべき国連の常任理事国であるロシアによる侵攻であるという点でこれまでの紛争と一線を画しています。さらにNATOなど西側諸国がウクライナに武器や資金を供与しロシアに経済制裁を加えることでウクライナを支援しており、戦地で戦っているのはロシアとウクライナの兵士であっても、実際にはNATOの勢力拡大を恐れるロシアとそれに対する西側諸国という東西両陣営の対決の構図を呈しています。この背景には、NA

T0に対抗する機関として存在したソ連と東欧諸国による「ワルシャワ条約機構」が、ベルリンの壁が崩壊し冷戦構造の瓦解とともにその役割を終えたとして1991年に解体されたのに対し、NATOの方はかつてのワルシャワ条約機構の一員であった東欧諸国やバルト三国などが相次いで加盟し勢力を拡大していることがあります。

日本はこのウクライナ侵攻に際し、西側諸国の一員としてNATO加盟国のアメリカやヨーロッパ各国と同調していますが、同様の軍事侵攻が北方領土に飛び火する可能性もあり、「対岸の火事」と気を緩めることはできません。さらに、このロシアの動きに乗じてロシア寄りの中国や北朝鮮が新たな動きをとる可能性にも警戒が必要です。中国はこれまでも、香港や新疆ウイグル自治区での人権問題、「台湾有事」や尖閣諸島などの海洋進出の問題があり、北朝鮮では核実験や弾道ミサイル発射実験の頻度がここへきて急になっていきます。また直近の5月後半の状況を振り返ると、5月23日にアメリカのバイデン大統領が来日して

日米首脳会談が行われ、日米関係の一層の強化や日本の防衛費増大の表明、IPEF（インド太平洋経済枠組み）の発足の宣言がなされ、翌24日に首脳会議が開かれたクアッド（日米豪印4か国による安全保障のための枠組み）と合わせて中国を念頭にしたアジア地域における連携強化が図られました。さらに今年復帰50年を迎えた沖縄の基地問題も日米安保上の大きな課題です。このように見えてくると世界の東と西の対立や各地の様々な問題が有機的にからんでいることがよくわかります。これら一連の動きは、平和へ向かつて進みたいと願う世界全体の思いとは裏腹に、あたかも次の大戦への準備を急速に進めているかのようにも感じられます。加えて5月25日には、日米共同で、まるで北朝鮮に対抗するかのように、戦闘機による戦術訓練まで行われ、国内では、有事の際の「敵基地攻撃能力」を自衛隊に保有させるべく「反撃能力」と言葉を変えて誤魔化し、これを進めようとする動きもあります。

このように、21世紀に入ってもなお「武力で国を守る

る」という古いやり方に固執している人類に対し「核兵器が抑止力となるというのは幻想であり、今やピンポイントで使える武器となった。核開発競争はますます激化しており、このまま進めば地球の破滅は免れない」（筆者要約）と先生は本書で警告しています。

では、どうしたら世界が平和になるのか。この問いに対し先生は実に単純明快に「武力から平和は生まれない。平和が欲しければ平和の種を播け」と説き、その論拠として「自分の播いたものを、自分が刈り取る」という大自然の法則を挙げています。麦を播けば麦が生え、カボチャの種を播けばカボチャができる、カボチャの種を播いたのに麦が生えることは決してない、という子供でも分かる道理です。だから「平和は平和の種からしか生まれえない、武力からは決して生まれえない」ということです。これは究極の真理だと私は確信します。

人間はもちろん自然界の一員なので当然この法則から逃れられません。それなのに何故、こと平和に関してだけ「武力によって平和が守られる」と思うので

しようか。これは人類の大きな勘違いです。核兵器を持つてお互いに牽制し合い危ういバランスを保っている状態は「平和」ではありません。その証拠にこれまでも紛争が絶えず、挙句の果てに今回の「ウクライナ危機」を招きました。ここにもどうしても発想の転換が必要で。

「平和の種を播く」とは人間が「愛の心」を持つこととです。「こちらが相手に対して愛の心を持ち武器を捨てれば、必ず相手が感動して、相手も武器を捨てる」。この記述を読むと、そんなうまい具合にいくだろうか、感動して武器を捨てるなどということが本当にあり得るだろうか、と誰しも疑問に思うでしょう。しかし山波先生の言われる「愛」というのは「他者への愛」、相手も自分も同じ「いのち」を持つかけがえない存在として相手を尊重する究極の愛です。自分がその愛の心を持って武器を捨てるとき、自分に人間変革が起こり、その時、自己の内部からあるエネルギーが発現して相手をも変革させる、というのです。このエネルギーとは、人間が物質界で扱うエネルギー

とは次元を異にする高次元の強大な力を持つエネルギー、即ち「(神のような)愛のエネルギー」であり、その発現には確固たるメカニズムがあることがネオ・スピリチュアリズムでは明らかにされています。また、この「他者への愛」(相手を自分と全く同じように大切に思い愛する心)を本当に持つためには「いのちは一つ」(自分も相手も同じ一つの命ということ)を知らねばなりません。これも実際なかなか難しいことです。人間が単なる肉体だけの存在ではなく、霊的な見えない部分も持つ存在であることを知らねばなりません。このところを本当に知りたい方はどうか山波先生のネオ・スピリチュアリズムに関する著作を読んで勉強をしていただきたいと思います。

しかし、仮にそこまで深く理解できなくても、最近には、戦争や事件や事故など世の中の不幸な出来事で犠牲になった方や被害に遭われた方に対して、自分や自分の家族のこのように悲しみ悼む気持ちを持つ人々を目にすることが多くなり、社会全体の共感力が上がっているように感じます。そういう他者への思いや

りや人間がだれでも持っている良心は本質的にこの愛の心と同じものなので、これを發揮することで本当の他者への愛の心を育てていくことも可能なのではないでしょうか。

今回のように実際に戦争が起きてしまってからこれを止めることは大変難しいですが、まず一人一人が自分の心の中に他者への愛の心を育み、日常生活の中で家族、友人、隣人など目の前の身近にいる人へ奉仕する（その人のために第一に考えて行動する）ことで平和な世界を少しずつ広げていくことが、今の私たち人類の最も重要な責務ではないでしょうか。一人一人の心が平和になれば、その人たちの住む国が民主国家

であれ、強権国家であれ、その国は必ず良くなつていき、必要に応じてその体制も変化していくと思えます。逆に言えば、今回戦争が起きてしまったことの責任は、戦争をしている国にあるのではなく、本当は人間の心に平和の種を播いてこなかった私たち一人一人にある、その責任は私に、そしてあなたにある、ということになるのです。

今この状況で、本書の重要性はますます高まりました。是非、多くの方に本書を読んでご自分の心に本当の愛の心、「平和の種」を播き育てていただきたいと切に願います。